第 95回日本小児科学会茨城地方会

会長　太田 正康（総合病院取手協同病院）

期日　平成22年6月13日（日）

会場　つくば国際会議場

1. 夏期休業を利用した肥満児童サマー教室の効果と問題点

筑波メディカルセンター病院　小児科[1)]、つくば国際大学　保健栄養学科[2)]
野末 裕紀[1)]、林 大輔[1)]、今井 博則[1)]、齊藤 久子[1)]、青木 健[1)]、平野 千秋[2)]、
市川 邦男[1)]

生活習慣の改善に向けた体験学習を通じ肥満解消に対するモチベーションの高揚を目的とした肥満児童サマー教室を、2009 年夏期休業中に開催した。2 泊 3 日の日程で、医学的検査と教育、栄養指導、運動療法を中心とした。参加者は 9 歳から 14 歳の 6 名で、肥満度は 26%から 82%であった。時間の限られた外来では困難な指導が効率よくできたが、その後ドロップアウトした例もあり、モチベーション維持のためさらなる工夫が必要と考えられた。

2. 栄養士介入により、肥満改善とともに家庭・学校生活の質も向上した高度肥満児の一例

茨城県立こども病院　栄養科[1)]、同小児科[2)]、筑波大学　小児内科[3)]、土浦協同病院　小児科[4)]
加藤 かな江[1)]、田中 竜太[2)3)]、渡辺 章充[4)]、鴨田 知博[3)]、土田 昌宏[2)]

高度肥満、知的障害の9歳男児。以前より家族には肥満に対する問題意識はあったが、暴言、暴力、過食、隠れ食いがあり対応困難であった。特別支援教育コーディネーター協力のもと学校での体重測定など患児参加型生活改善を実施し、来院時は自宅での食事・体重記録に対する母親への精神的フォローを重視した。栄養指導開始1年で肥満度が 184→87%と改善するだけでなく暴力や隠れ食いが消失し情緒の安定などの効果もみられた。

3. 思春期早発症および腹痛にて発症した副腎皮質癌の8歳男児例

筑波大学　小児内科[1)]、同小児外科[2)]
稲田 恵美[1)]、 鈴木 悠介[1)]、福島 紘子[1)]、穂坂 翔[1)]、鈴木 涼子[1)]、福島 敬[1)]、須磨崎 亮[1)]、星野 倫子[2)]、藤代 準[2)]、小室 宏昭[2)]、金子 道夫[2)]

8 歳男児で突然の腹痛を呈し近医を受診した。恥毛や年齢に比し大きい陰茎などの男性化徴候、腹部超音波で腹腔内腫瘤を認め当院へ紹介入院した。画像検索で左副腎の巨大腫瘤、肺多発転移を認め、腫瘍生検を施行した。副腎皮質癌が疑われ、左副腎腫瘍摘出術を施行した。副腎皮質癌は非常にまれな疾患で外科切除 が唯一有効とされ予後不良である。病巣の完全摘出不能例の有効な治療法は確立されておらず早期発見・治療が望まれる。

４．同種造血細胞移植を施行された小児の発育に関する検討

茨城県立こども病院　小児血液腫瘍科[1)]・総合診療科[2)]・筑波大学　小児科[3)]
小林千恵[1)], 小池和俊[1)], 泉維昌[2)], 吉見愛[1)], 中尾朋平[1)], 加藤啓輔[1)], 福島敬[3)], 土田昌宏[1)]

1990 年 8 月から 2009 年 12 月までに当院で同種造血細胞移植を受け，長期経過観察中の 100 例を対象に初診時および最終観察時の身長と BMI を検討した。最終観察時の身長は中央値で-1SD。-2SD 未満が 31 例であった。BMI は 37 例(37%)で低体重に分類され、同種造血細胞移植後の小児では低身長でありながら、低体重となる傾向がみられた。また高 TG 血症・耐糖能障害は BMI に関わらず認められており、合併症予防のための長期観察が重要であると思われた。

５．造血細胞移植後の気管狭窄－多科連携治療により ADL が拡大した1女児例－

茨城県立こども病院　小児血液腫瘍科[1)]、筑波大学　小児外科[2)]、茨城県立こども病院　小児外科[3)]、同在宅支援室[4)]
吉見 愛[1)]、加藤 啓輔[1)]、中尾 朋平[1)]、小林 千恵[1)]、小池 和俊[1)]、
楯川 幸弘[2)]、川上 肇[3)]、平井 みさ子[3)]、矢内 俊裕[3)]、寺門 直子[4)]、
連 利博[3)]、土田 昌宏[1)]

15 歳女児。生後 2 か月時に急性混合型白血病を発症し、2 回再発し 3 度の造血細胞移植を受け寛解を続けている。慢性 GVHD による肺実質障害、側弯、胸郭変形、関節拘縮、筋萎縮がある。8 歳時から進行性の呼吸障害が出現し、12 歳時に腕頭動脈による主気管支の圧排が判明した。14 歳時に挿管呼吸器管理後に抜管困難症になったが、胸骨柄部分切除、腕頭動脈吊り上げ術、気管外ステント術を施行後に気管切を受け呼吸状態は安定した。在宅人工呼吸器を用いて退院する予定である。

６．血友病定期補充療法における診療連携の役割と課題

筑波大学　医学専門学群医学類[1)]、同小児科[2)]
田宮 裕太郎[1)]、後藤 悠大[1)]、福島 敬[2)]、中尾 朋平[2)]、山口 玲子[2)]、
福島 紘子[2)]、鈴木 涼子[2)]、須磨崎 亮[2)]

血友病児では、診断後早期から血液凝固因子の定期補充療法を実施することによって関節症や重篤な出血のエピソードの防止効果があるとされている。本研究では、診療連携によって定期補充療法を実施している1症例を縦断的に分析した。患児側および医療者側の観点に立って、メリットとデメリットを抽出し、診療連携の継続・ネットワーク拡大のために必要な課題を検討し報告する。

７．軽微な皮膚感染症からフルニエ壊疽を来たした高 IgE 症候群の 1 例

土浦協同病院　小児科[1)]、同皮膚科[2)]、同小児外科[3)]、
霞ヶ浦医療センター　小児科[4)]、東京医科歯科大学　小児科[5)]

東 裕哉[1)]、星野 雄介[1)]、黒澤 信行[1)]、渡辺 章充[1)]、渡部 誠一[1)]、 野嶋 浩平[2)]、
盛山 吉弘[2)]、堀 哲夫[3)]、山口 真也[4)]、長澤 正之[5)]

症例は 15 歳男。乳児期より湿疹・皮膚感染症を繰り返し、1歳時に高 IgE 症候群と診断され、ST 合剤を服用していた。2010 年 3 月、臀部の軽微な皮膚感染症からフルニエ壊疽(会陰部を主体とする壊疽性筋膜炎)を来たし、広範囲のデブリードマンと強力な抗菌療法を必要とした。術後は複数回に分けて 閉創を行い、現在は感染の再燃なく回復を認めている。本症例の経過と治療方針について文献的考察を加えて報告する。

8. 当院における左心低形成症候群の治療成績

茨城県立こども病院 小児科[1)]、同心臓血管外科[2)]
塩野 淳子[1)]、菊地 斉[1)]、村上 卓[1)]、小池 和俊[1)]、土田 昌宏[1)]、坂 有希子[2)]、五味 聖吾[2)]、
阿部 正一[2)]

2002 年から 2009 年の 8 年間に、当院において 15 例の左心低形成症候群を経験した。死亡例は 7 例で、2 例は手術前に死亡、2 例は Norwood 手術の周術期に死亡、残り 3 例は他の姑息手術の周術期に死亡した。生存例 8 例はすべて Glenn 手術を終了し、5 例が最終の Fontan 手術に到達した。胎児診断は 15 例中 5 例であった。いまだ予後不良の疾患ではあるが、長期生存例もある。

9. Infliximab を使用したγグロブリン不応の川崎病の乳児例

筑波大学 小児内科[1)] 筑波学園病院 小児科[2)]
今川 和生[1)]、梶川 大悟[1)]、高橋 実穂[1)]、仁井 純子[2)]、牧 たか子[2)]、藤田 光江[2)]、
堀米 仁志[1)]

3 か月男児。第 5 病日に川崎病と診断され、同日γグロブリン(IvIg)が投与された。第 8 病日に IvIg 不応のため当院に転院し、IvIg とウリナスタチンが投与されたが、不応のため、第 21 病日に Infliximab が投与された。第 22 病日に解熱したが、最大径 7mm の冠動脈瘤が残存した。IvIg やステロイドパルス療法不応の川崎病患者に対し、Infliximab が有効であった症例が報告されている。我々の Infliximab 使用経験について報告する。

10. 浣腸を施行中に心肺停止となった Duchenne 型筋ジストロフィー (DMD)の 2 例

取手協同病院 小児科
鈴木奈都子、宮川雄一、櫻井牧人、齋藤蓉子、佐塚真帆 、寺内真理子、太田正康

【症例1】17 歳男性。16 歳で睡眠時鼻マスク陽圧換気 を導入された。便秘のため、父とトイレで浣腸を施行していたとこ ろ、「胸が苦しい」と言いながら意識が消失、心肺停止となった。
【症例2】29 歳男性。16 歳より在宅で人工換気療法を 行っていた。麻痺性イレウスのため入院し、浣腸

を施行したとこ ろ、大量に排ガスした直後に心肺停止となった。2 症例とも拡張型心筋症を呈していた。DMD では消化器症状に注意を払うこ とが大切である。

11. 土浦市 4 小学校における新型インフルエンザ流行の記述疫学調査

霞ヶ浦医療センター 小児科
山口 真也

平成 21 年度の 2 学期から 3 学期にかけて、土浦市の 4 つの小学校で、インフルエンザについてのアンケート調査を行った。2594 名の児童のうち 909 名がインフルエンザに罹患したと報告し（罹患率 35.0%）、そのうちの 725 名が A 型と診断された。各症状の出現率、合併症、発熱時間、抗インフルエンザ薬の処方率、発熱から検査までの時間などについて、アンケートから得られた結果を報告する。

12. 当院における休日の小児患者対応の実態について

茨城西南医療センター病院小児科[1)]、同救命センター長[2)]
長谷川 誠[1)]、鈴木 宏昌[2)]

当地域の小児救急体制は２病院による部分輪番制をとっており、年間約 220 日の輪番日のうち 93%が当院担当である。当院は半径 25km 圏内の唯一の救命救急センターとしての機能も担っており、休日に小児診療に割り当てられるスペースおよびマンパワーは限られている。輪番制がよく周知され機能している一方で、とくに連休中の１病院にかかる負担は大きく、新型インフルエンザ流行再来前に、行政も加わった検討が望まれる。

13. 茨城県北地域における病院小児科部分的集約の試み

日立製作所日立総合病院 小児科
小宅 泰郎、石踊 巧、諏訪部 徳芳、村長 靖、星野 寿男、菊地 正広

2009 年 4 月より、日立総合病院と北茨城市立総合病院の間で小児科診療の部分的集約を行った。北茨城市立総合病院小児科には外来診療機能のみを残し、時間外の小児救急医療と入院治療を日立総合病院小児科に集約した。部分的集約化の主なメリットは、病院勤務小児科医の QOL の向上である。集約化される側の病院にも外来診療機能を残した点が、地域住民の方々の理解を得ることが出来た原因の一つと思われた。

14：当院における平成21年度の入院食物負荷試験

筑波メディカルセンター病院 小児科
林 大輔、野末 裕紀、今井 博則、齋藤 久子、青木 健、市川 邦男

食物負荷試験は食物アレルギーの診療では最も重要な検査である。当院では入院と外来で食物

負荷試験を行っている。平成22年度に行った当院の入院食物負荷試験の件数は70件で、男 47 人、女 23 人であった。負荷食品は卵 36 人、牛乳 20 人、小麦 9 人、その他 5 人であった。負荷試験の陽性率は40％であり、陽性患者の32％は経過観察のみで症状が消失した。11％はエピネフリンの投与を必要とした。

15. 当院アレルギー外来に通院中の食物アレルギー153例の検討

茨城県立こども病院　小児科[1)]、同栄養科[2)]
黒田　わか[1)]、加藤　かな江[2)]、泉　明香[2)]、土田　昌宏[1)]

今年 1～4 月までの 4 ヶ月間にアレルギー外来を受診した食物アレルギー153例を検討した。このうち外来で食物負荷試験を 35 例に実施した。また食物依存性運動誘発 An4例中 1 例、入院歴のある重症例 2 例、ピーナッツアレルギー1 例の計4例にエピペンを処方しているがいずれも未使用である。除去食解除を適切な時期に行うこと、保育園・幼稚園・学校への指示に加え勉強会などで周囲の理解を得ることが今後の課題である。

16. 羊水過多、ベル型胸郭、Robertson 転座を認め、14 番染色体父性片親ダイソミー（UPD14）と診断し、N-CPAP にて在宅管理となった女児例

茨城県立こども病院　新生児科
本山　景一、藤山　聡、雪竹　義也、新井　順一、宮本　泰行、土田　昌宏

母は 47 歳(6 経妊 5 経産)。妊娠中、高度の羊水過多に対し複数回の羊水穿刺を要した。在胎 38 週 1 日、経膣分娩にて 3768g で出生した。呼吸不全に対し、N-CPAP を必要とした。ベル型胸郭、腹直筋離開、多発奇形を認め、染色体検査で Robertson 転座を認めた。遺伝子検査にて 14 番染色体父性片親ダイソミー(UPD14)と確定診断した。4 ヶ月時、在宅 N-CPAP にて本院退院となった。

17. 筑波大学附属病院における小児科医の分娩立会いと新生児の蘇生の現状

筑波大学　医学専門学群医学類[1)]、小児科[2)]
五味　詩絵奈[1)]、齋藤　誠[2)]、宮園　弥生[2)]、西村　一記[2)]、須磨崎　亮[2)]

いわゆる低リスクの分娩においても、出生後、緊急的に蘇生処置を必要とする新生児は約 10%いるといわれている。また分娩を行っている総合病院において蘇生処置は小児科医が行うことが多く、日常診療を行いながら、緊急の分娩立会いを行っている。今回、緊急の分娩立会いが、どの程度行われているか把握するために、筑波大学附属病院における低リスクの分娩での分娩立会いの現状や蘇生処置を受けた新生児の短期的予後を検討し報告する。

18. 当院における脳炎・脳症の臨床的検討

日立製作所水戸総合病院　小児科
小宅　奈津子、吉田　尊雅、森山　伸子、永井　庸次

対象は2008年～2010年4月に当科に入院した脳炎・脳症22例。①意識障害の遷延、②脳波での全般性高振幅徐派などの持続、③CTまたはMRI異常の3項目のうち2項目以上を満たす例を脳炎・脳症と診断した。原因はインフルエンザ9例、マイコプラズマ2例、ロタウイルス1例、薬剤1例、不明9例であった。臨床経過、脳波所見、予後について文献的考察を加え報告する。

19. インフルエンザ脳症に罹患した発達障害児の復学支援の検討

北茨城市立総合病院　内科[1)]、日立製作所水戸総合病院　小児科[2)]、同リハビリテーション科[3)]、日立製作所多賀総合病院　リハビリテーション科[4)]

氏家　士富子[1)2)]、森山　伸子[2)]、吉田　尊雅[2)]、小宅　奈津子[2)]、永井　庸次[2)]、鬼越　美帆[3)]、森田　亜由美[3)]、大谷内　秀子[4)]

発達障害の診断でフォロー中の児4名が、昨年秋の新型インフルエンザ流行時期にインフルエンザ脳症に罹患した。うち3例に発症前後でWISC-Ⅲを施行した。2例でFIQの低下が認められた。罹患後、視覚認知障害、記憶障害、注意集中障害、遂行機能障害などがより顕著になった症例もあり、学校生活における学習や対人関係に支障をきたした。運動障害がみられなくても、復学にあたっては、丁寧な支援が必要と思われた。

20. 当院における胆道閉鎖症の診断時期：便色カラーカード導入のインパクト

茨城県立こども病院外科[1)]、筑波大学小児外科[2)]

連　利博[1)]、川上　肇[1)]、平井　みさ子[1)]、済陽　寛子[1)]、益子　貴行[1)]、矢内　俊裕[1)]、藤代　準[2)]、金子　道夫[2)]

胆道閉鎖症早期発見を目的として 1998 年に導入された便カラーカードの効果を検証するため導入前後の初診時日齢について調査した。こども病院では、初診日の中央値は 97 年以前(n=18)53 日で 98 年以降（n=9）では 70 日と遅れていた。カラーカード陽性は2例、陰性は2例、1例には異常としつつなおフォローされていた。一方、筑波大学では前 69 日(n=21)、後 47 日（n=43）と早期発見の傾向にあったが、有意差（p=0.24）はなかった。

21. 臍部小切開による小児外科手術

茨城県立こども病院　小児外科[1)]・小児泌尿器科[2)]

矢内　俊裕[1)2)]、益子　貴行[1)]、済陽　寛子[1)]、川上　肇[1)]、平井　みさ子[1)]、連　利博[1)]

当科で過去 4 年間に施行した臍部小切開による手術症例 64 例について検討した。手術時年齢は日齢 0～14 歳（新生児 22 例, 乳児 29 例）で、疾患の内訳は肥厚性幽門狭窄症 35 例、腸回転異常症 4 例、十二指腸閉鎖症 1 例、小腸閉鎖症 3 例、腸重積症 3 例、その他小腸疾患 4 例、尿膜管・卵黄嚢管遺残 11 例、卵巣腫瘤 3 例であった。臍部小切開による手術は操作性を殆ど落とすことなく種々の疾患に対して応用することができ、整容性に優れていた。

22. イレウスを呈した乳児急性虫垂炎の１例

茨城県立こども病院　小児科[1)]　、同小児外科[2)]
佐藤 未織[1)]、玉井 香菜[1)]、本山 景一[1)]、板橋 健太郎[1)]、泉 維昌[1)]、濟陽 寛子[2)]、
益子 貴行[2)]、川上 肇[2)]、平井 みさ子[2)]、矢内 俊裕[2)]、連 利博[2)]、土田 昌宏[1)]

症例は１歳０ヶ月の女児。嘔吐・発熱で近医受診し急性胃腸炎として経過観察された。発症３日目に腹部膨満が増悪し胆汁性嘔吐を伴ったため、イレウスの診断で当院に紹介された。イレウスの原因診断に難渋したが、腹部造影 CT で急性虫垂炎と診断した。開腹の結果は穿孔性虫垂炎・腹腔内膿瘍の所見であった。急性虫垂炎は 1 歳以下の乳児では稀である。腹部膨満・嘔吐など不定消化器症状および炎症反応上昇を呈する乳児では、急性腹症の原因として急性虫垂炎も念頭におく必要がある。

23. 虫垂リンパ濾胞過形成がみられた反復する腸重積の１例

筑波大学臨床医学系小児外科[1)]、病理診断[2)]
坂元　直哉[1)]、瓜田　泰久[1)]、金子　道夫[1)]、小室　広昭[1)]、藤代　準[1)]、
新開　統子[1)]、星野　論子[1)]、小野　健太郎[1)]、佐藤　泰樹[2)]、野口　雅之[2)]

今回我々は虫垂リンパ濾胞による虫垂の腫大がみられた腸重責の症例を経験したので報告する。
症例は 3 歳男児、7 回目の腸重責にて受診し、高圧浣腸を施行したが整復できず，手術の方針となった。術中所見では虫垂の中央付近が棍棒状に一部腫大しており，腸重積の先進病変の可能性も否定できないと考えられた。 虫垂粘膜は無数の微小隆起を伴う濾胞構造により覆われており、病理ではリンパ濾胞過形成であった。術後経過は良好で現在のところ再発は認めていない。